

遊び心、忘れていませんか

帰りたい家は、過去の家そのものではなく、幼い頃に感じていた「安心」「好奇心」「自由」「恐れ」といった感覚を取り戻す場所である。子どもの頃、段ボールで自分の家をつくり、初めて「守られている」という感覚を知った。部屋の中をぐるぐると走り回り、浴室で泳ぎ、身体を自由に動かす……そのとき、世界と直接つながっていた。成長するにつれ、私たちは空間との関わり方をよく知っており、本能のままに遊びながら、最も純粋で原始的な方法で世界を観察している。過去を振り返し、何度も描き直すうちに、成長の過程で自分が何を得て、何を失ったのかに気づいた。子どもの頃は、ただ直感で「好きな場所」を描いていたが、今は機能や配置、効率を考えてしまう。理性と自己中心的な思考に支配された大人の生活は、子どもの世界から遠ざかり、そこに生じる断絶が、純真さや遊びの本質を問いかける契機となる。外見は少し可愛らしく見えるかもしれないが、目指すのは「可愛さ」そのものではなく、その奥にある「気つき」と「内省」である。柔らかな形と遊び心のあるスケールは、人の心をそっと解きほぐし、もう一度世界を感じ直すための装置となる。「可愛い」と感じた瞬間、私たちは再び子どもの視点と、かつて見ていた美しい世界を思い出す。その気づきこそ、「帰りたい家」の意味であり、この建築の核である。

1 プロローグ



幼少期の記憶の中で、建築空間はしばしば大きく、輪郭の曖昧なものとして感じられる。廊下の奥や扉の裏、光の差す隅などの余白は、機能を超えて感情や想像を受け止める場となる。成長するにつれ空間の機能は明確になるが、その過程でこうした曖昧な感覚は薄れていいく。しあわせは消えるのではなく、無意識の中で記憶の基盤として残り続ける

2 子どもと大人の視点、記憶の違い

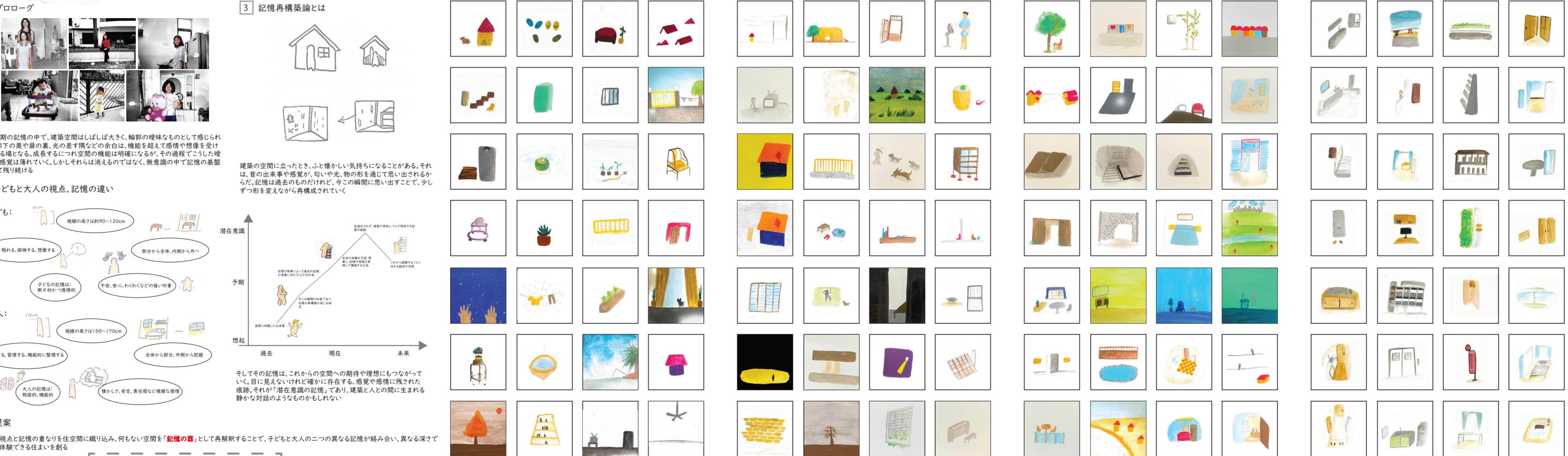


3 提案

二つの視点と記憶の重なりを住空間に織り込み、何もない空間を「記憶の器」として再解釈することで、子どもと大人の二つの異なる記憶が絡み合い、異なる深さで空間を体験できる住まいを創る



3 記憶再構築論とは



0~6歳

家の記憶は色や触った感覚が強く残っている。壁の色や家具の手触り、日差しの入り方など、目で見て感じたことが印象に残っている。部屋の広さや間取りのつながりはよくわかつていなかった。空間を全体として捉えるよりも、目の前の色やものに集中していた。大人は家の機能や間取りを重視している。生活がスムーズに進むように空間を考えている。この時期は、子供の視点は色彩や感覚の断片的な記憶で、大人は機能や構造として家を捉えているといえる

7~12歳

色や家具の特徴だけでなく、家の間取りや部屋のつながりを理解し始める。どの部屋がどこにあるのか、どんな使い方をしているのかがわかるようになる。大人は変わらず、使いやすさや効率を考えて間取りを組み立てている。自分はまだ色や細かい部分に興味があるが、同時に家全体の構造も意識するようになる。この段階の記憶は、色を軸にしつつ、空間のつながりも見えてくる複合的なものだ

13~18歳

家の間取りや機能に加え、時間の流れのなかで空間を見るようになる。家族がどこでどんな活動をしているか、朝から夜までの動きを意識する。色は背景的な要素で、空間の使われ方や生活リズムのほうが記憶の中心になる。大人は生活の管理や合理性を重視するが、自分は空間の快適さを判断するときに役立っている。色や光は単なる装飾ではなく、生活の質に関わる要素として認識している。この段階の記憶は、子供時代の感覚的な記憶と大人の合理的な空間認識が混ざったものになっている

19~現在

大人になった今は、家の空間は利便性や機能性が重要だ。動線や収納、光の入り方など、生活のしやすさを基準に空間を選び、整えている。しかし、子供のころからの色や雰囲気に対する感覚は残っていて、居心地の良さや視覚的な快適さを判断するときに役立っている。色や光は単なる装飾ではなく、生活の質に関わる要素として認識している。